法助動詞 can の〈例示〉機能と存在的モダリティ

友　澤　宏　隆

1. はじめに

英語の法助動詞 can は，他の法助動詞と同様多義的であり種々の用法を持つが，その一つとして次のように「主語名詞句の指示対象の例となるもの」を示す用法がある：

(1) A real number can be an integer, a fraction, or a decimal.

(2) A parallelogram can be a regular polygon in the form of a square.

(3) Allergy medicine can be pills, liquids, or even sprays for your nose.

(1) は「実数 (real number)」の例として「整数 (integer)」「分数 (fraction)」「小数 (decimal)」などがあることを述べている。(2) は「平行四辺形 (parallelogram)」の例として「正方形 (square) の形の正多角形 (regular polygon)」の場合があることを述べている。(3) は「アレルギーの薬 (allergy medicine)」として，「錠剤 (pills)」「液体薬 (liquids)」「噴霧薬 (sprays)」などの形のものがあることを述べている。以下の例も同様である：

(4) In that country a school can be a tent in the desert, a bus that travels the city streets, or a classroom in the shade of a mango tree.

(5) Subject complements can also be adjectives. (Berk 1999 : 45)

(6) Genitives take various shapes. They can be determiners ; they can be proper nouns ; or they can be full noun phrases. (Berk 1999 : 67)

これらにおいて，(1) (2) のように主語名詞句と述語動詞 (be) の補語名詞句が「上位カテゴリー」と「下位カテゴリー」という一種の「カテゴリー関係」を成している場合もあれば，(3)—(6) のように単に主語名詞句の指示対象の形態として述語動詞の補語名詞句に示されているものが存在するということを表している場合もある。しかしいずれにせよ，これらの場合 can は「主語名詞句の指示対象の例示」という働きを示しているという点では共通していると考えられる[1]。法助動詞 can に認められるこのような〈例示〉の機能について，その成立の基盤について考察することによりその動機づけを与えることが小論の目的である。

2. 法助動詞 can と「可能性」のモダリティ

法助動詞 can の意味は一般に「能力 (ability)」「可能性 (possibility)」「許可 (permission)」などに分類されるが，そのうち「可能性」の意味は，いわゆる「存在的モダリティ (existential modality)」と「認識的モダリティ (epistemic modality)」の観点から論じら

れることが多い[2]。例を示すと次のようになる：

(7) Lightning can be very dangerous. (Leech 2004 : 74 ; 大江 1983 : 12)

(8) Even expert drivers can make mistakes. (Leech 2004 : 74 ; 大江 1983 : 12 ; 澤田 2006 : 227)

(9) This picture can be a Chagall. (Johannesson 1976 : 56 ; 柏野 1993 : 194 ; 澤田 2006 : 253)

(10) It can't be the postman at the door. It's only seven o'clock. (Swan 2005 : 334)

(7) は「稲妻は大変危険なことがある」ということで，「稲妻はいつも危険であるわけではないが，ときに大変危険な場合がある」ということである。(8) は「たとえ運転に慣れた人でも間違いを犯すことがある」ということで，「運転に慣れた人でも一般に，ときとして運転のミスをしてしまう場合がある」または「運転に慣れた人の中にも運転のミスをしてしまう人がいる」ということである。この (7) (8) のように，「可能性」を表すとされる can が「事例の存在」の表現に関わると見なされる場合，それは「存在的モダリティ」の用法として位置づけられる[3]。これに対して (9) (10) の場合は，can は「命題内容が真である可能性についての（話者の）認識・判断」に関わると見なされるものであり，「認識的モダリティ」の用法として位置づけられる[4]。(9) (10) は命題内容が真である可能性について，それぞれ肯定的・否定的な認識・判断を表している[5]。

3. 法助動詞 can と存在的モダリティ

法助動詞 can が「可能性」を表す場合，異なる二つのモダリティの観点から捉えられることを見たが，ここではこれらのうち「存在的モダリティ」の用法についてさらに検討を加えることにする。この用法の場合，一般的な特徴として，(i) 一般的・総称的な内容を描写するものであり，非特定的な状況に言及するものであること，(ii) 状況・事柄の頻度を表し，その状況・事柄の存在の仕方がまばらであること（すなわち，「散在的」であること）を表すものであることが指摘されている[6]。以下の例でこれについて考えてみる：

(11) The weather can be awful. (Palmer 1990 : 107)

(12) The Straits of Dover can be very rough. (Thomson and Martinet 1986 : 133 ; 澤田 2006 : 229)

(13) Roses can be mauve. (Palmer 1990 : 107 ; 澤田 2006 : 227)

(14) Poinsettias can be red or yellow. (Huddleston and Pullum 2002 : 184)

これらの場合，すべて主語名詞句の指示対象の一般的な性質・特徴についての描写になっている。(11) (12) は「気候の一般的傾向」について述べたものであり，(13) (14) は「色の出現に関する一般的傾向」について述べたものである。また，これらは「散在的な状況・事柄」を表すことから，以下のように「存在の数量化」に関わる 'sometimes' および 'some' などを用いて，法助動詞を含まない表現にパラフレイズすることができる：[7]

(15) The weather is sometimes awful.

(16)　The Straits of Dover is sometimes very rough.

(17)　Some roses are mauve.

(18)　Some poinsettias are red, others yellow.

(15) (16) は (11) (12) に対応するが，頻度副詞 sometimes により，その状況がときどき散発的に生じるものであることを示している。(17) (18) は (13) (14) に対応するが，数量限定詞 some により，その状況が主語名詞句の指示対象の範囲の一部に限定されるものであることを示している[8]。

法助動詞 can の存在的モダリティの用法の二つの一般的特徴について検討したが，このうち (ii) の「状況・事柄の散在性」に関しては付言しておくべき点がある。次の例を見てみよう：

(19)　Scotland can be very warm in September. (Swan 2005 : 98)

(20)　Ann can really get on your nerves sometimes. (Swan 2005 : 98)

(21)　He can be very tactless／helpful. (Huddleston and Pullum 2002 : 184)

これらの場合，その状況は 'common or typical' (Swan 2005) であるか，あるいは主体（主語名詞句の指示対象）の 'characteristic behaviour' (Huddleston and Pullum 2002) を表すものであり，それが生じる頻度が「散在的」ないし「散発的」と言えるほど低いものであるかどうかは明確ではない。すなわち存在的モダリティの用法に関して，その状況の実際の出現は「散在的／散発的」と形容するのが適切であるような頻度の低いものからそれよりは多少頻度が高いと思われるものまで，いくらかの幅がありうるということである。ただし，いずれの場合も，それが恒常的と言いうるほどの高頻度で出現するわけではないという点は共通していると考えられる。

4. 法助動詞 can の中核的意味と存在的モダリティ

法助動詞 can の「存在的モダリティ」の用法について考察してきたが，次にこの用法をこの助動詞の中核的な意味との関連において捉えることを試みる。先行研究において述べられているように，(「可能（性）」を表す) can の中核を成す意味は「潜在的能力 (potential)」であると特徴づけることができる[9]。すなわち，ある事柄が「可能」であるためには，その事柄に主体的に関与する者に「潜在的な能力」が備わっていることが通常前提とされ，そのような「潜在的能力」が存在してこそ，その事柄が「可能」になるということである[10]。潜在的能力は，「潜在的」なものであるがゆえに，つねに顕在化するものではなく，その顕現は非恒常的であるのが自然であるが，そのような「潜在的能力の非恒常的顕現」を表すのが存在的モダリティの用法であると考えることができる。この「潜在的能力」とその「非恒常的顕現」(すなわち，事柄の非恒常的な出現) とは因果関係のメトニミーによって結びつけられた表裏一体の関係にあり，それが上で見たこの用法の can の（頻度副詞や数量限定詞による）パラフレイズの容易さの理由であると考えられる。

次にこのメトニミックな関係の意味合いについて少し考えてみることにする。潜在的能力

が非恒常的に顕現するとは，要するにそれが顕現する場合としない場合があり，前者が全体の場合のうちの一部を占めるということである。これは上で見たように，実際には「(事柄の出現の) 時」に関する場合 ((11) (12) など) と「(主語名詞句の指示対象である) 個体」に関する場合 ((13) (14) など) という二通りの場合があるが，スキーマ的にはいずれも一種の集合的な包含関係によって特徴づけられるものであると見なすことができる。たとえば (11) の場合だと，「天候についてのすべての場合」のうち，「荒れた天候の場合」がその一部として含まれるということである。(13) の場合だと，「すべての花色のバラ」の中に「藤色のバラ」が含まれるということである[11]。

5. 法助動詞 can の〈例示〉機能と存在的モダリティ

上で考えた法助動詞 can の存在的モダリティの用法における意味のつながりをまとめると次のようになる：

(22)　潜在的能力——→非恒常的顕現 (「時」または「個体」に関して) ——→集合的包含関係

ここで冒頭に挙げた can が「主語名詞句の指示対象の例示」を表す用法に戻って考えてみると，この用法は，(22) の意味のつながりにおいて「集合的包含関係」の意味が焦点化し，「潜在的能力」の意味が (ある程度) 背景化したものであると見なすことができると思われる。たとえば (1) の場合だと，主語名詞句の「実数」と述語動詞の補語名詞句の「整数，分数，小数」は，後者のカテゴリーが前者のカテゴリーに含まれるという形で「集合的包含関係」を構成しているが，それが主語名詞句である「実数」の「潜在的能力」に基づくものであるとは (常識レベルにおいては) 考え難い。同様に (4) の場合だと，主語名詞句の「学校」の具体的な形態として述語動詞の補語名詞句に示されている「砂漠の中のテント」などが含まれる (すなわち，「学校」の集合の中に「砂漠の中のテントという形のもの」が含まれる) ということで，やはり一種の「集合的包含関係」を構成しているが，それが主語名詞句である「学校」の「潜在的能力」に基づくものであるというわけではない[12]。これは同じ名詞句を主語にした次の例と比較すれば理解できるであろう：

(23)　A school <u>can</u> be a very powerful community for kids partly because it's sometimes the only community they belong to.

これも存在的モダリティの用法の一例であり，それによって表される意味は上述のような集合的包含関係の観点から捉えることができるが，この場合は (4) とは異なり主語名詞句の潜在的能力は背景化しておらず，むしろそれが前景化している印象があり，can は (4) のような〈例示〉の機能を果たしているとは見なされない。このように，can が〈例示〉の機能を果たすためには，「集合的包含関係の焦点化」による「潜在的能力の背景化」が要請されると考えられる。

6. 結び

本論考では，法助動詞 can に認められる〈例示〉の機能を，その「可能性」の意味と関係づけられる「存在的モダリティ」の用法の中に位置づけ，その意味のつながりにおけるある種の意味の焦点化・背景化という観点からその機能を捉えることを試みた。can を含む法助動詞をめぐる問題は文法研究の中心的な課題の一つであり，さまざまな立場から論じられているが，法助動詞全体を見渡せばなお解明が十分とは言い難い面もあろうかと思われる。小論で提示されたような視点――認知的な視点――が他の法助動詞の用法の分析においても有効なものでありうるか否かについての探究は稿を改めねばならない。

注

1. このほかに，次の例も同様に考えることができるであろう：
   In fact, celebrating can be as simple as talking, listening, learning something new and playing a game together.
   これはある祝日の祝い方について述べたもので，「『祝う』といっても必ずしも大層に考える必要はなく，ただいっしょに語り合ったり新しいことについて学んだりゲームをしたりするといった程度のことであってもよい」ということである。すなわち，「祝うこと(celebrating)」の具体的な行動の例として talking 以下の事柄が候補として考えられるということである。この場合，can は単なる〈例示〉にとどまらず聞き手に対する〈行動の提案〉の機能をも担っていると考えられる。
2. can の用法全般の概要については，鷹家（2005）に簡明にまとめられた解説がある。
3. Palmer（1990：107-109），Huddleston and Pullum（2002：184, 185），および澤田（2006：第 10 章）を参照。
4. Palmer (1990：60-63), Huddleston and Pullum (2002：180, 181), および澤田 (2006：第 11・12 章）を参照。
5. このような「認識的モダリティ」を表す can は，(10) のような「非確言的／非断定的(non-assertive／non-affirmative)」なコンテクストで用いられるのが典型的である。Huddleston and Pullum（2002：180, 181）および澤田（2006：187, 188）参照。
6. (i) については大江（1983：13), Leech（2004：83），澤田（2006：233）を参照。これに関して，柏野 (1993；2002) は can を「可能性」の面から特徴づけて，このような can の表す可能性を「一般的な可能性 (general possibility)」であると規定している（柏野 1993：193-207；柏野 2002：第 2・3 章)。(ii) については澤田（2006：222, 228）を参照。なおこれに関して，「散在的」という特徴づけのほかに「散発的」「再発的」「偶発的」などの言い方も用いられる。柏野（1993：193-207）および澤田（2006：228）を参照。
7. このようなことから，「存在的モダリティ」の代わりに「量化的モダリティ」の名称も用いられる。澤田（2006：228）を参照。
8. このことから，「散在的な状況・事柄」の具現形態には頻度副詞と数量限定詞に対応

する二通りの形があることになる。澤田（2006：235, 236）を参照。なお，この後者に対応する場合，主語名詞句は必ずしも複数名詞句あるいは不定名詞句である必要はなく，単数あるいは定の名詞句も許容される（Palmer（1990：107），Huddleston and Pullum（2002：184）を参照）。

9. Sweetser（1982：486），Sweetser（1990：53），Bolinger（1989：13），大江（1983：15），柏野（1993：204），および柏野（2002：34）を参照。

10. 「可能（性）」と「能力」の密接な関係についてはすでに多くの指摘がある。Leech（2004）は，「能力（ability）」の can と「可能（性）（possibility）」の can の境界は明確ではなく，前者は後者を含意するために両者はとりわけ近い関係にあるとしている（Leech 2004：75）。また Coates（1983）は，can の三つの意味（「能力」「可能（性）」「許可」）のうち「可能（性）」は中心に位置づけられるが，それと「能力」「許可」との境界はファジーであるとしている（Coates 1983：86）。澤田（2006：221, 222）を参照。これに関連して，本多（2006）は can の意味を，行為が成功しうる原因を行為者の属性に求める捉え方を背後に持つ「能力可能（ability）」と，原因を行為者の属性以外に求める捉え方を背後に持つ「状況可能（possibility）」という二つの観点から捉え，can の持つ多くの「発話の力（illocutionary force）（依頼・提案・申し出など）」はその後者に由来するものであるとしている。この「能力可能」と「状況可能」の区別は，「力動的モダリティ（dynamic modality）」に分類される「主語の内在能力」と「主語を取り巻く状況能力」に部分的に対応する（鷹家（2005）を参照）。なお，can に関して Leech（2004）の言う「可能（性）（possibility）」は，「存在的モダリティ」の用法と「力動的モダリティ」の「主語を取り巻く状況能力」を表す用法の両方を含むものである。

11. （14）の例は can...or... の形になっているが，このような場合は一般に，or によって接続されている要素は想定されるすべての場合を網羅するものであるので，（14）は can を取り去った次の（a）の文と実質的には同じ内容を表すことになるという（Huddleston and Pullum 2002：184, 185）：

(a) Poinsettias are red or yellow.

しかしこの場合，or のない形にすると，can の有無によりその意味内容に変化が生じる：

(b) Poinsettias <u>can</u> be yellow.

(c) Poinsettias are yellow.

この場合（b）は「ポインセチアには葉の色が黄色のものが含まれる」ということであり，事実に合致しているが，（c）は通常の解釈では「ポインセチアは葉の色が（一般に）黄色である」ということになり，これは事実に反することになる。

12. この場合はむしろ逆で，「砂漠の中のテント」が「学校」として機能しうる潜在的な能力を持つと考えるのが妥当であると思われる。すなわち「潜在的能力」の帰属に関して，主語名詞句と補語名詞句との間で一種の反転が生じていると考えられる。

参考文献・例文出典

大江三郎（1983）『講座・学校英文法の基礎 第五巻 動詞（II）』 東京：研究社出版。

柏野健次（1993）『意味論から見た語法』 東京：研究社出版。

柏野健次（2002）『英語助動詞の語法』 東京：研究社。

澤田治美（2006）『モダリティ』 東京：開拓社。

鷹家秀史（2005）「『法助動詞の教え方』覚え書」『岡山朝日研究紀要』第 26 号，5-16。(http:/www.kct.ne.jp/~takaie/auxiliary.doc)

本多啓（2006）「助動詞 Can の多義構造――〈能力可能〉と〈状況可能〉の観点から」『英語青年』152. 7, 426-428。

Berk, L. M. (1999) *English Syntax : From Word to Discourse*. New York/Oxford : Oxford University Press.

Bolinger, D. L. (1989) "Extrinsic possibility and intrinsic potentiality." *Journal of Pragmatics* 13, 1-23.

Coates, J. (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London : Croom Helm.

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge : Cambridge University Press.

Johannesson, N. L. (1976) *The English Modal Auxiliaries : A Stratificational Account*. Stockholm : Almqvist & Wiksell International.

Leech, G. (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed. Harlow : Pearson Longman.

Palmer, F. R. (1990) *Modality and the English Modals*, 2nd ed. London : Longman.

Swan, M. (2005) *Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford : Oxford University Press.

Sweetser, E. E. (1982) "Root and epistemic modals." *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society* 8, 484-507.

Sweetser, E. E. (1990) *From Etymology to Pragmatics : Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge : Cambridge University Press.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*, 4th ed. Oxford : Oxford University Press.